

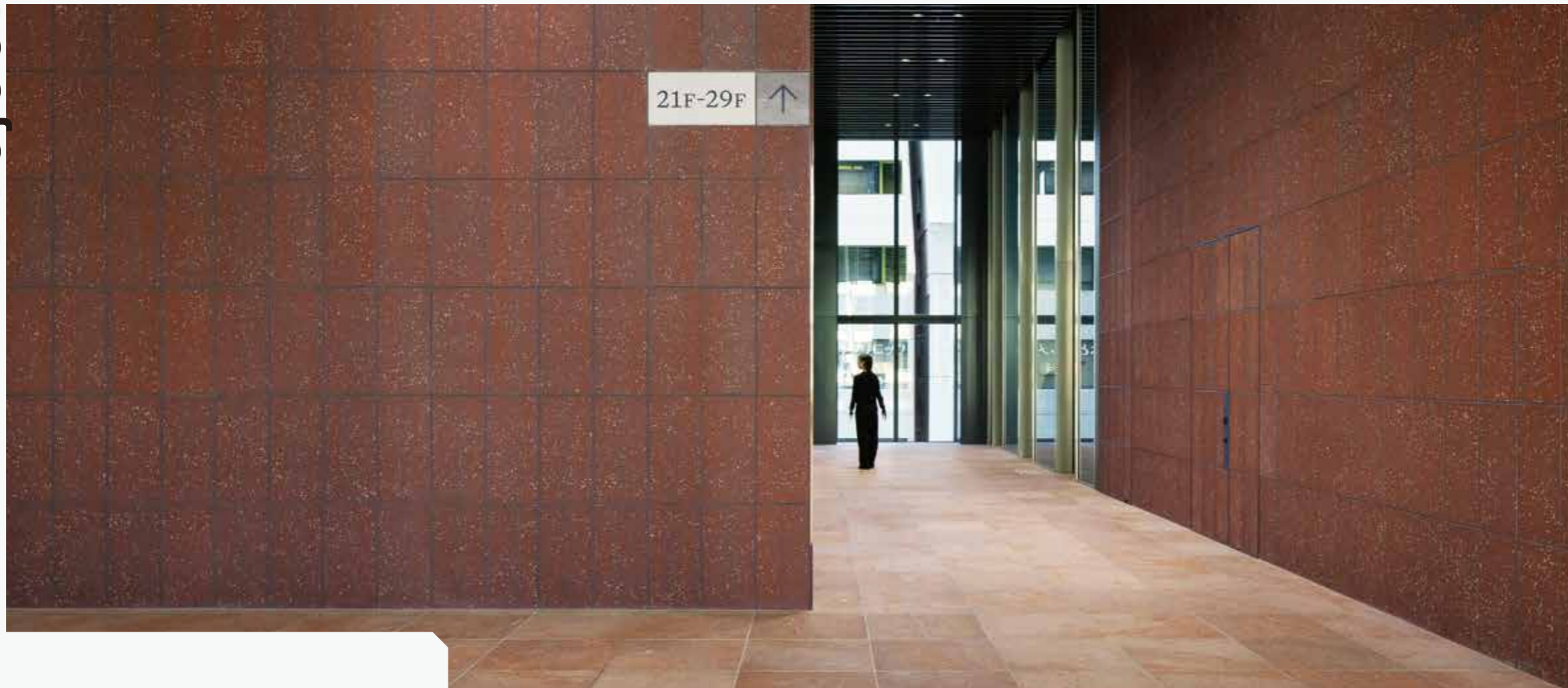
# Dear IMAGINE

「想像」と「創造」をつなぐもの

白いキャンバスに、  
色を塗るように。  
四角いブロックを、  
組み立てるように。

タイルもまた、その一枚から  
想像を解き放つことができる。  
手で触れて、眺めてみれば、  
次々とあふれてくる  
無限のイメージ。  
そんな気持ちを込めて、  
わたしたちのオーダーメイドは  
対話を重ねながら、  
丁寧にタイルづくりに  
取り組みます。

ひとの想像力によりそい、  
カタチを創造する。  
そんな、ものづくりの現場を  
ご体感ください。



OSAKA

## 淀屋橋ステーションワン

YODOYABASHI Station One

### その一枚に関西への想いを凝縮

「ひと」のつながりから生まれた淀屋橋ステーションワンプロジェクト。きっかけとなったのは、クリエイターや建築デザイナーなど、ものづくりに精通する方々と交流できるよう設けた工場見学の場でした。さまざまな背景を持つ企業や各分野の専門家たちと触れ合い、アイデアをぶつけ、刺激し合うなかで、このプロジェクトは動き始めました。

はじめは丁寧にディスカッションを重ね、色や素材などのイメージ共有からスタート。近代建築が多く建ち並ぶ淀屋橋エリアの地理的特性を考え、二つの条件を満たす特注タイルをゴールに見据えました。関西へのこだわりをタイルで表現するため、関西圏で採取できるマテリアルを使用すること。そして周辺環境を考慮し、レンガ色のタイルであること。その二つを叶えるタイルを目指し、いよいよ製作のフェーズへと進みました。

構想を具体化し、実際のものづくりへと踏み出したその段階で、ひとつの大きな壁が目の前に立ちました。これまで淡路島工場では特注タイルの製造を行ってきましたが、本プロジェクト当初に求められていたのは、レンガ色を呈するタイル表現でした。しかし、この色味を高温焼成による磁器質タイルで再現することは非常に難しく、試作段階でも課題が多く残っていました。

そこで着目したのが、淡路島で採取され、瓦の原料として用いられているかわら粘土です。淡路瓦の代名詞ともいえる「いぶし銀」は、特殊な焼成工程を経て得られるものですが、通常の焼成では鉄分を多く含むこの粘土は赤褐色を呈します。淡路島工場は、この通常焼成時に現れる色味

に可能性を見出し、その特性を生かすことを選択しました。

一方で、かわら粘土は、一般的な磁器質タイルに用いられる土の焼成温度よりも適正温度が低いという特性を持っています。そのため、近年の淡路島工場でのタイル製造において使用された実績はほとんどなく、焼成条件による色味や寸法のばらつきといった量産に関するデータが十分に蓄積されていない状態からのスタートとなりました。言い換えれば、本プロジェクトは再現性や安定性を前提とした製造ではなく、条件検証そのものから始める開発でもありました。

淡路島のかわら粘土を100%使用するという、これまでに前例のない試みのもと、過去の試作品アーカイブや技術研究所に蓄積された膨大な資料を参照しながら、製作と並行して製法開発を進行。試作は数十種類に及びました。焼成工程では、窯内での配置や温度、酸素条件によって色合いや寸法精度が大きく左右されるため、あらゆる条件を検証しながら、土・水・炎をコントロールする高度な技術が求められました。

そうした試作・検証を重ねる製作段階の後半において、新たに依頼されたのが、淀屋橋の敷地で採取された土をタイルに使用するという要件でした。既に進めていたかわら粘土によるアプローチを土台としながら、敷地の土の特性を見極め、レシピを再調整。再現性の高い条件を導き出し、最終的な製法が確立されました。

こうして完成した淀屋橋ステーションワンの特注タイルは、前例のない条件から生産までをおよそ半年から一年で駆け抜けた共創プロジェクトの結晶です。タイルの可能性を信じ、淡陶社が長年培ってきた技術とクラフトマンシップを凝縮した、ひとつの挑戦となりました。

前例がない。  
だからタイルづくりは  
おもしろい。

淀屋橋の敷地で採取された土と淡路島のかわら粘土をマテリアルにしたタイル



淀屋橋ステーションワン

大阪の南北をつなぐ橋としてヒト、モノ、コトの架け橋となっていた淀屋橋にそびえる淀屋橋ステーションワン。エリアNo.1の高さを誇る高層ビルとしてビジネス、ライフスタイル、カルチャーの発信地となっている。

撮影協力：淀屋橋ステーションワン／インテリアデザイン：TERUHIRO YANAGIHARA STUDIO／施工：中央日本土地建物株式会社、京阪ホールディングス株式会社、株式会社みずほ銀行／設計・監理：株式会社竹中工務店／撮影：株式会社ナカサ&パートナーズ

# Process

一枚に潜む、  
無数の可能性を探して。



試験室

試作品

## 製品開発プロセス

### 1 ヒアリング

ご依頼主へのヒアリングからスタート。どんなタイルで、どんな空間にしたいのか？など想いをカタチにするため、対話をひとつひとつ重ねていきます。

### 2 材料の選定

イメージを具現化できるものや、配合したいマテリアルなどをピックアップ。過去に製作したアーカイブなどの膨大な資料から、最適な素材を選定します。

### 3 試作

実寸での製作前に、量産ラインでの再現性を想定して10cm角などの小形状で試作を開始。色やテクスチャー、デザインの確認に10～50回程度の試作を重ね、最適な素材の割合を見極めていきます。

### 4 レシピ作成

実機による見本サンプルの作製を重ねながら、すべての製造工程において対応可能な素材の割合や製法を見極め、量産が可能なレシピを作成します。技術研究所でのJIS品質検査も製品開発の鍵となります。

### 5 製造

依頼から生産までおよそ半年～1年間の製作を想定。生産後も性能評価や改善開発に基づいたクレーム調査など手厚いフォローを一括で管理します。

まだ  
この世界にない  
一枚を

～新たなタイルを共創する～



あかつき [AKT]  
(P.042)

蛍光灯の廃ガラスを100%リサイクルしたガラスタイル。タイル原料である土を一切使用せず、従来の原料や製法に依存しない新たな取り組みとして誕生しました。角度によって輝きを変える独特な意匠が特長です。



porous [POR]  
(P.318)

兵庫県内で排出されたごみから生成された熔融スラグや淡路瓦用の粘土、老舗線香メーカー(株)薫寿堂の廃材をタイル資源として再利用したporous。資源や文化を一枚に凝縮しながら、大谷石のような多孔質特有の空隙表情をデザインとして表現しました。

## Co-Creation Case

淡陶社のタイルを使用した施工事例をご紹介します

### YOKOHAMA

#### Kアリーナ横浜

神奈川県みなとみらい21地区に開業した世界最大級の音楽特化型アリーナである「Kアリーナ横浜」および隣接するホテル棟の外周(ミュージックテラス)の床に淡陶社のタイルが使用されています。品質やメンテナンスなど、安定性が高いことが選定基準となりました。世界中から集まるカルチャーを足元から支えるだけでなく、色や感触

など風合いも感じられる空間を演出しています。



磁器質K102(特注色)  
400×200、300×200、  
200H



### KOBE

#### 兵庫県立兵庫津ミュージアム ひょうごはじまり館

博物館と兵庫県最初の庁舎の復元施設が複合された「兵庫県立兵庫津ミュージアム」。県内の歴史や兵庫津(ひょうごのつ)の魅力を再発見できる場所となっています。淡路にゆかりのある瓦や淡陶社製のタイルが使用されるほか、タイルでも兵庫県の歴史や魅力を表現しています。



陶扇(とうせん)II [TSN]  
TSN-200/300H(P.228)



### MINAMI-AWAJI

#### 道の駅「うずしお」

兵庫県南あわじ市にある渦潮にもっとも近い道の駅「うずしお」。うずまちテラスと合わせ、この道の駅の外壁には複数色のタイルを縦向きに積み重ね自然界の不規則な美しさを表現しています。また厚みと凹凸を持たせることで木質層も合わせて表現しています。



外装壁:組み合わせ張り  
内装壁(写真中央):虹彩 KOUSAI



# ALTERNATIVE ARTEFACTS

DANTO

1885年より続く淡路島の老舗タイルメーカーダントーから、デザインを通してタイルの可能性を探るブランド「Alternative Artefacts Danto」が誕生しました。  
TERUHIRO YANAGIHARA STUDIOによるクリエイティブ・ディレクションのもと、従来のタイルの形、用途にとらわれることなく、素材としてのタイルの可能性を探るプロジェクト。世界で活躍する建築家やデザイナー、アーティストをコラボレーターとして日本に招き、新たな視点からタイルづくりに取り組んでいきます。

A.a. Dantoブランドの商品は下記のURLからご覧ください。

[aa-danto.com](http://aa-danto.com)